

ミヤマカケスに聞いてみたい、2つの質問

旭岳温泉のクロスカントリースキーコースや自然探勝路を歩いていると、季節を問わずミヤマカケスを見かけます。雑食で、昆虫類やさまざまな植物の種子、果実を食べる野鳥です。

カケスの仲間は好奇心が強いといわれますが、確かに（こちらも含め）何かを観察しているように見えることもあります。

冬季にカモが越冬にくる「ワサビ沼」でも、沼のほとりの木枝にとまり、じっとカモがいる水面を見えています。「もしかして、カモを見ているの?」と聞いてみたくになります。

キツネや猛禽（もうきん）類が（エサとして）カモを捕える機会を伺っている、というなら理解しやすいです。ミヤマカケスも他の野鳥のヒナなどを食べる場合もあるそうですが、カモを捕まえることはできないでしょう。カモのほうも、特に警戒しているようにはみえません。もしバードウォッチャーのように、沼にいるカモに興味があって見ているのならおもしろいと思います。

また、他の鳥の「鳴き真似」をすることも知られ



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然解説員などで活躍する人々をリレーしています。



翼の一部に、美しい青色模様があります。ドングリを秋のうちを集めて冬に備えて「貯食」することが知られています

ています。普段の「ジャーツ、ジャーツ」という「しゃがれ声、からは想像できないような声も出せます。ネコやカエルの真似もできるそうです。こちら鳴き真似をする理由を聞いてみたくになります（異性の興味を引くために役立っているという説もあるようです）。

自然の中で生き物を見ていると、隙のない行動に感心し、生存競争の厳しさを意識させられることが多いです。そんな中、時折「? ? …」な行動をするミヤマカケスに出会うと、また別の意味で自然を見るおもしろさを感じます。

旭岳ビジターセンター 井田千尋
(イラストも)



本で知るふるさとこの山

札幌冬季五輪の前に旭岳アイスバーン調査

「大雪山はどんな山?」と問われれば、心を洗われるような雄大な姿をほめたたえる方もいれば、豊富な自然を誇る方もいるでしょう。忘れてならないのは、素晴らしい文化の宝庫でもあるということです。

今回一例として紹介するのは、「大雪山国立公園 研究・文献集」です。中には2千700編もの論文が入っています。



膨大な書棚を占拠するほど、「大雪山国立公園 研究・文献集」

膨大な量の論文を集めたのは、東川町、富良野市など10市町で構成している大雪山国立公園連絡協議会です。2010年度から4年かけて集め、バインダー21冊になります。昆虫編が7冊で最も多く、次いで植物編と地質編が4冊ずつ、国立公園編と鳥類編が2冊ずつ、ほ乳類編と雪氷・気象編が各1冊です。昆虫編の論文が群を抜いているのは、元上川町立層雲峡博物館長、保田信紀さん（上川町在住）がこれまでに2千編を優に超える論文、短報を明らかにしたことが貢献しています。

環境省東川自然保護官、佐藤一交

さんは、「多くの研究対象地となったことは、大雪山の自然環境が他に類を見ない特別な自然環境であるからです」と評価しています。論文は多岐にわたり、ユニークな発表も多く、たとえば、札幌冬季オリンピックの前に旭岳でアイスバーンの研究が行われていました。1968年の北海道大学低温科学研究所の論文によると、ヨーロッパアルプスのアイスバーンがスキーの滑降、回転競技に最適といわれていたことから、旭岳登山道付近で2月18日から一週間、調査が行われました。雪質は非常に硬く、スコップで掘れないので氷用のこぎりを使い、悪戦苦闘しながら学術的調査が進められました。

町史編集専門員、西原義弘